

現代建築の概観と課題

—この20年間の建築デザインの流れと日本における建築家と発注者の意識と環境の変化—



会場風景



中崎隆司氏

第1部 この20年間の建築デザインの流れ

1. バブル景気からその崩壊後まで

今から20年前の1988年、日本はバブル景気の時代です。まだソ連という国がありました。またこの時代は、インターネットも普及していませんし、パソコンもそれほど使われていません。バブル景気で建築界も非常に活況を呈していて、世界中から日本に建築家が仕事を探しに来て、実際につくっています。当時建築の世界では、ポストモダン建築とハイテク建築、脱構築主義建築（デコンストラクション）が注目されていました。

〈ポストモダン建築〉ポストモダンは、歴史的な様式を建築に引用するというのがその大きな特徴です。合理主義や機能主義が中心だったモダニズムの建築に装飾性のようなものを採り入れようという動きです。

たとえばその代表例のひとつであるフィリップ・ジョンソンの「AT&Tビル」（1984年）には、超高層の頂部にギリシャ神殿などにあるペディメントを引用しています。マイケル・グレイブスの「ポートランド市庁舎」は、ファサードにギリシャ様式風の列柱をグラフィック的に採り入れたのが特徴です。

日本でも磯崎新さんが、「つくばセンタービル」でポストモダンの建築をつくっています。国家プロジェクトで建設された学園都市の中心的な建物に、当時流行していたポストモダン建築のデザインが採用されたということは非常に面白いことだと思います。裏側に広場があり、そこにルネッサンス期にミケランジェロがつくったカンピドリオ広場を反転したものが引用されています。

〈ハイテク建築〉建築は現在、工業製品の組み合わせといった要素が非常に強くなっていますが、ハイテク建築に

は、その工業製品をそのまま見せてやろうという意識が働いています。本来なら内側にあるエスカレーターや足場のようなもの、設備や構造を外に出すといった特徴があります。

代表的な建築家はリチャード・ロジャースとノーマン・フォスターなどです。ロジャースとレンゾ・ピアノが共同設計した「ポンピドーセンター」がその代表的な建築です。これができたのは1977年で、モダニズムの延長線上にあるとも考えられますが、この時代からハイテク建築の流れが始まっています。

〈脱構築主義建築〉脱構築主義建築の建築家としては、ピーター・アイゼンマン、フランク・ゲーリー、ザハ・ハディド、ダニエル・リベスキンドなどが有名です。とくにフランク・ゲーリーの「ビルバオ・グッゲンハイム美術館」は外装にチタンを使っていて、みなさんにも馴染みがあると思います。彼らは日本でも仕事をしていて、そのひとつがマイケル・グレイブスの「アルテ・横浜」です。横浜のポートサイド地区に住都公団が建てたものです。リチャード・ロジャースも、新宿・歌舞伎町の「林原第五ビル」（1993年）を設計しています。

なお、日本人の建築家には、脱構築主義建築の設計する人はほとんどいません。それはたぶん、日本では異形は評価されないという部分があるからだと思います。同質性の国民ばかりがいる中でずっと生活してきていますので、異形ではなく同一性を評価する土壤があるのでしょう。ただし、グローバル化が進み、日本人も海外で仕事をしたり、海外から日本に来て仕事をする人たちも増えていますので、これからはかなり大胆な形のもので日本でつくられる可能性も高くなっていくように思います。

日本の場合、ポストモダン建築は、歴史的引用よりも装飾的な建築に走ってしまったような傾向がありました。過剰に石や金属を使った建築が非常に多く、高松伸さんの「キリンプラザ大阪」もそのひとつです。ただ、この建物はたった20年で壊されてしまいました。上の方の行灯みたいところに多数の蛍光灯が入っていますが、そういった設備がたぶん20年のうちに老朽化して、その維持や管理がたいへんになってきたことから売却して解体するという決断がされたのだと思います。

磯崎新さんはバブルの時期、つくばセンタービル以外にも「お茶の水スクエア」というポストモダンの建築をつくっています。これは主婦の友社が施主でしたが、今は日本大学のホールとして使われています。

ノーマン・フォスターのお茶の水にある「センチュリータワー」(1991年)は、ハイテク建築の特徴が非常に出ていて、構造を外壁のデザインに使っています。これは旺文社が施主でしたが、今は違う会社に売却されています。

こういう時代が過ぎた後に、私は『AERA』に「バブル建築は遠くなりけり」という原稿を書いています。

記事では、ある空き地の写真を紹介しています。それはザハ・ハディドという脱構築主義建築の代表的な女性建築家が日本のディベロッパーと一緒に建築の計画をしていた場所を写したものです。バブル崩壊とともにそのプロジェクトは中止になり、地下工事は終わっていましたが、それが全部埋め戻され更地になりました。

バブル期には「ネクサスワールド」や「オートポリス」など壮大なプロジェクトがありましたが、その中にはバブルが崩壊して中断したり、壊されたりといったものも少なくありませんでした。

「ネクサスワールド」は、世界中から建築家を集めて集合住宅を競作させるというプロジェクトで、レム・コールハース、オスカー・トゥスケ、クリスチャン・ド・ボルザンパルク、マーク・マック、スティーブン・ホール、日本人では石山修武さんが参加しました。この中でいちばん評価されたのがレム・コールハースの建物で、これは日本建築学会賞を受賞しています。「ネクサスワールド」は今も福岡市の香椎に残っています。よく似たことが、現在、中東や中国などで盛んに行われるようになってきています。バブルといいますか、お金があるときには、よくこういうかたちで、世界中から建築家を呼んでつくるといった事例が出てきます。

「オートポリス」は、阿蘇山の近くに、F1を呼ぶためのサーキット場とホテルと美術館をつくったプロジェクトでしたが、完成した後、ホテルはほとんど使われることなく、今は廃虚になっていると思います。美術館も今使われていないようですが、ここには当時75億円で落札されたというピカソの「ピエレットの婚礼」という絵画が収蔵されていました。この絵画も結局、売却されたというふうに聞いています。

この『AERA』の記事にも引用していますが、高松伸さんは「建築は社会に対して意味や力を持つものだと考えているが、バブルの時期は、その夢の部分を許容しないぐらい経済のメカニズムが過剰に働いた。建築のロマンチズムは問題にならなかった」と語っていました。現在もまた経済のメカニズムが働いていて、建築の夢といったものを受け入れられないような時代になりつつあるように私は感じ始めています。建築は絶えず人間の欲望と連動していて、人間の欲望の質が高いほど、つまり志が高いほど建築はいいものになるのですが、バブルのときにはいい建築をつくるというよりもお金をかけるという方向に傾いていたように感じています。

バブル崩壊後、ポストモダンの建築は姿を消していきました。

2. 地方箱物の時代

バブル崩壊後、日本政府は、地方での公共投資を盛んにするために、地方自治体が建築をつくりやすい状況をつくりました。地域総合事業債のような借金によって建築をつくり、その返済に地方交付金を使うという方法です。これにより、地方に公共ホールや美術館、庁舎などを建築家たちがつくっていく時代が始まりました。

その中で地位を確立していったのが伊東豊雄さんと安藤忠雄さんです。伊東さんの作品には「長岡リリックホール」などがあり、安藤さんは兵庫県の仕事が多くなります。そこで彼は実績を積み、大阪、そして海外へと仕事を広げていきました。

バブルが弾けてすぐくらいにゼネコン汚職事件が起きました。工事関係ではこのような問題が明るみになったけれど建築家・設計事務所の選定はどうか、ということで、私は『AERA』の編集部から依頼されて「決め方に少々難アリ」という記事を書いています。地方自治体の設計者選定は入札が多く、金額で発注先を決めるため談合が行われやすいという体質がありますが、事件を機にこういうものをなくしていこうという動きが始まりました。

設計者選定に関して、そのときに出てきたひとつの方法がコミッショナー制です。市長や知事に代わってコミッショナーが設計者を特命で決めるという方法です。磯崎新さんや黒川紀章さんたちがコミッショナーになりましたが、この人たちを中心に建築家が動くという問題が生まれました。

もうひとつ出てきた設計者選定の方法がプロポーザルです。これは案で決めるコンペとは異なり、実績や仕事に取り組む姿勢などを評価して設計者を決めるという方法です。ところが、地方自治体などの中には勝手に解釈をして、プロポーザルと言いながら案を求めるところも出てきました。「プロポーザルコンペ」という非常に不思議な言葉が生まれ、今でもプロポーザルと言いながらコンペの案に近いものが求められたりしています。

私は、設計者選定では、特命、随意契約がいちばんいいと思っています。知事なり市長なりが建築家について調べて、「この人になぜ依頼するのか」を住民に伝えることさえできれば全然問題はないと思います。ただし、箱物批判、公共事業批判がある中で、建築に思いや夢をもってそういったことに取り組もうという知事や市長は少なくなっています。

地方で公共施設が多くつくられた時代、国の補助金や地方債を使ってつくったものの、その後の維持管理や、施設運営のための企画にはお金を用意していないために、それが活用されていないというケースが多く出てきました。こういった時期に、私は『AERA』に「ハードをつくってソフトに苦しむ」という記事を書いています。設備設計者から、デザイン過剰の建築や設備過剰の建築が多くなっている、という指摘があったことが、この記事を書ききっかけでした。地方自治体の担当者を取材すると、「後で困るのはわかっているが、まずつくるのが大事で、後の問題は次の担当者が考えればよい」というような発想があることがわかりました。

3. モダニズムの見直しと

「建築を弱くする」という傾向

地方の仕事が増えて建築家が地方で仕事をした時代は、それほどデザイン的な特徴は出てこなかったのですが、ひとつの流れとしては、もう一度モダニズムの建築を見直そう、という動きが出てきます。たとえば、モダニズムの建築と同じように四角い形態をとりつつも、表層の部分に少し特徴を出すというようなことが現れてきます。海外の例としてドミニク・ペローの「フランス国立図書館」がありますが、こういったデザインの建築がコンペをとったこともあり、その後ポストモダンの建築が姿を消していきました。

この時期、海外の建築家で注目され始めるのが、ヘルツォーク&ムーロンという2人の建築家のグループです。彼らも初期のころは四角いモダニズムの形態に近いものをつくっていましたが、その後、大きく表現が変わってきています。北京オリンピックのメインスタジアムの「鳥の巣」も彼らが設計したものです。

また、これは最近の傾向ですが、建築家各自のキャラを立てると言いますか、何か共通の方向性やデザインの傾向をつくらずに、それぞれが個性的なものを出していくというような方向が見られます。

日本でバブル崩壊後、モダニズムを見直す中に出てきたひとつの形態に楕円があります。この時期、楕円の形が本当に多く出てきました。円と違って楕円は焦点を2つ持つことから、「曖昧にする」という意識が働いているように思われますし、「建築を弱くしていく」ことにもつながるように思われます。

楕円の形が出てきたもうひとつの要素は、CADで楕円

が作成できる、ということが挙げられます。1990年代の半ばくらいから、建築家たちがコンピュータによる製図システムを使うようになりましたが、その影響は非常に大きなものだと思います。あまり経験がなくても、過去のものをもそのままコピーしてペーストすることができずし、手書きでの表現力はなくても、コンピュータグラフィックスを使えばレベルの高い表現ができます。経験の差などが一気になくなり、35歳前後の若い建築家が、いきなり非常に大きな仕事をするということも可能になってきています。

楕円が多用されるという流れの次は、ルーバーが人気を集めます。これも建築の強さを消したいという意識、建築のファサードを非常に柔らかくしたいという意識が働いた結果として出てきたものです。この表現の代表的な建築家が隈研吾さんです。彼が最初にルーバーを使ったのは「水／ガラス」という作品です。

妹島和世さんの「マルチメディア工房」は、建築の半分を地中に埋めるといったものですが、これも建築の存在を消したいという意識が働いています。

このころ伊東豊雄さんは、「今の建築は誰かひとりオリジナルの設計をすると、みんな嫌になって追随はしない代わりに、皆自分が考えたかのように、同じようなデザインが同時発生してくる」と語っていますが、そういった状況が1990年代後半に出てきます。

バブルが弾けたこの時代、当時30代だった建築家たちにとって、ほとんど個人住宅ぐらいしか仕事はなかったのですが、彼らはひとつの空間ですべてが一望できるような非常の写真写りのいい住宅をつくり始めます。彼らのもうひとつの特徴は、施主と絶対に喧嘩しない、いつもニコニコしながら話し合うといった点です。彼らは「楽しい建築」などと言っていますが、「個人の空間が幸せであればそれでいい」というような建築であり、この世代は社会性といった意識が非常に希薄になっているように感じます。彼らは今40代になっていますが、相変わらず狭小住宅を中心に住宅ばかりつくっていて、大きな建築になかなか行けず、そこに今、次の30代が出てきて、一気に大きなものをつくるような状況が出始めています。

4. 2000年以降の傾向

2000年以降の非常に特徴的な出来事として、ルイ・ヴィトンが青木淳さんにブティックのファサードだけのデザインを依頼します。それまで建築家は内部もファサードもひとりでデザインするものでしたが、これは建築設計の分業化の始まりともいえるでしょう。このあたりから日本でも建築家はファサードだけ、全体の外観だけのデザインを行い、実施設計や監理は組織事務所などが行うといったやり方が盛んになります。現在、東京で進んでいる巨大プロジェクトは、ほとんどそういうかたちで進められています。

ルイ・ヴィトンが建築家にブティックの外観の設計を依頼したということは、日本の一般メディアに、また別



の影響を与えることになりました。日本の一般メディアのいちばんのクライアントはこのようなファッションブランドであるからです。彼らが建築に注目するというのが、そういった一般メディアが建築を取り上げるきっかけになりました。『カーサ・ブルータス』や『Pen』、『TITLE』などがその代表的な雑誌です。

またこの時代には建築の複合化が始まります。伊東豊雄さんの「せんだいメディアテーク」（2000年）は、古くなった図書館の建て替えですが、図書館だけではなく、集会場や市民ギャラリーなどを複合化して、人が集まる機能がたくさん盛り込まれました。現在、日本の中心市街地で活性化に取り組もうとしているところは、こういった複合化した建築をつくる傾向があります。複合化はその都市の規模によってプラスになる場合とマイナスになる場合があると思います。巨大な複合化を行うと街をつくるのではなくてビルをつくることになって、逆に街を衰退させるという危険性もあるからです。複合化の計画は、街の規模や周辺状況などを見ながら考える必要があると感じています。

ロンドンにある「テート・モダン」は、ヘルツォーク&ムロンという2人の建築家が、元々発電所だった建物を美術館に変えたものです。こういったリノベーションやコンバージョンが90年代から非常に多く出てきます。

日本でも21世紀になって以降、リノベーションやコンバージョンの事例が出てきています。たとえば隈研吾さんは、木造3階建の古い旅館をリノベーションして高級な温泉旅館に変えたという銀山温泉の「藤屋」、戦前に建てられたビルを商業施設に変えたという「COCON烏丸」などを手掛けています。

このリノベーションやコンバージョンのニーズは今も続いていて、古い建物をどう生かしていくかというのは、大きな課題だと思います。

1990年代以降、コンピュータが建築にたいへんな影響を与えてきていると言いましたが、構造解析もコンピュータでできるようになり、小さな構造設計事務所でも大きな建築の構造設計ができるようになりました。こういった構造設計では、木村俊彦さん、佐々木陸郎さん、佐藤淳さんのほか10人くらいの方が今、日本で活躍していて、建築家と組んで非常に面白い仕事をしています。隈

研吾さんや妹島和世さん、伊東豊雄さんも、だいたいこういう人たちと組んで仕事をしています。

今の時代のもう1つの例として、石上純也さんの「神奈川工科大学KAIT工房」があります。4面全部ガラス張りで、柱もないというに近いほど非常に細いものが使われています。これは妹島さんのところで言いました「建築の存在を消したいという意識」をもっと進めていったものだと思います。当初はこの細い柱はグリッド状に配列される予定でしたが、作業上の空間を均一にするのではなくて大小つくるということを施主から求められた結果、最終的には非常にランダムな配置になったということです。ただ、こういう4面ガラス張りですと夏はたいへんだと思います。床はコンクリートですから蓄熱はするでしょうし、何らかの対策はとらないといけないと思いますが、かなり行き着くところまで行っているように感じます。

5. ゆるやかにつながる時代へ

また先ほど、ひとつの空間ですべてが一望できるような住宅の話をしました。戦後の日本には住宅に個室をつくるのが社会が成熟していく方向だと思っていた時期があったように思います。ところが、家庭内暴力が発生したり、親子のコミュニケーションがなくなるなど、個室を与えることが家族や個人にとって必ずしもいいかたちを生まないという事例が出てきました。その結果、このように住宅をひとつの空間にするというかたちが出てきたのですが、やはりワンルームですと、いつも顔を合わせていなくてはならない、汚いものも見えてしまう、ということもあって、それを避けようという方向が出てきました。

その例として、藤本壮介さんの「Tハウス」という住宅があります。専門用語ではアルコーブといいますが、ちょっとくぼんだ空間、この部分に入ればつながることもつながらないことも選択できるというような空間づくりが意識されています。このようにいわば緩やかにつながるような空間の方が生活しやすいし、個人の意識を形成するにも今の時代に合っているんじゃないかということを感じます。これは日本だけの特徴なのかもしれませんが、日本人は完全に個室にしない方が空間が馴染むのではないかと思います。これは住宅レベルですが、これからの日本の都市づくりにも、緩やかにつながるかたちをどうつくるかということが課題になってくるように感じています。

私は『ゆるやかにつながる社会』という本を出したときに、30代の建築家31人に計画段階、設計段階の内容について取材したものをまとめましたが、その3分の1以上の建築家がゆるやかにつながる空間をつくっていました。こういったことからこれからは住宅だけではなくて公共的な要素のある建物にも、ゆるやかにつながる、つまり「ひとりであるか」「人とつながるか」を自由に選択できるような空間がつけられていくだろうと感じています。

第2部 建築家と発注者の意識と環境の変化

私は昨年1年間、本を書くために1950年から1976年までに生まれた建築家28人に、建築家が社会の変化をどう感じているかというヒアリング調査をしました。後半はその調査でわかったことを紹介しながら、現在の建築の状況やこれからの建築がどういう方向に行くかということについてお話します。

1. 建築家の意識と環境の変化

前半ではこの20年間の話をしましたが、今からほぼ20年前の1987年に日本建築家協会が結成されました（当初は新日本建築家協会として設立、1996年に日本建築家協会に名称変更）。日本の建築家たちが、「わが国でも欧米のように、職能人として建築家を位置づけたい、社会に認知してほしい」という願いの下にこういった協会をつくったのですが、欧米の建築家は簡単に建築家という職能を手に入れたわけではありません。クライアントや社会と闘いながら、また妥協しながら彼らは彼らの地位というものを築きました。ただ、日本では建築家という職能は、明治以降、社会に後から入ってきたものです。1987年にこういう動きが起こるといことは、百年以上かかってもそれが社会に定着しなかったということだと思います。

■社会性という呪縛からの解放

この20年間で、国や地方自治体の仕事がどんどん少なくなりました。著名な建築家の場合でも、日本での仕事は少なく、ほとんどが海外だということです。日本で活動している若い建築家は、個人住宅か商業施設くらいしか仕事がない状態です。このことは、建築家が日本の社会や国や地域を考える機会が非常に減っているということの意味しています。

こういう状況で、若い建築家が社会というものをそれほど考えないというか、むしろ「建築をつくるときは社会のことを考えなきゃいけない」という呪縛がなくなってきました。その結果、「自分が楽しい、快適だと思う空間をつくれればいい」といった感覚で建築をデザインするという傾向が非常に強くなっています。また最近では、建築家であってもファッションやインテリアなどデザインに関するものには何でも取り組むというような世代が出てきています。

■中心性の喪失

これまではどの時代にも建築デザインにはひとつの方向性というものがあつた、その中心となる建築家があつたのですが、今はそういった建築家が一切いません。前半では、藤本壮介さん、石上純也さんといった若い建築家の話をしましたが、彼らと安藤忠雄さん、伊東豊雄さんなどが同じ土俵に立つような状況になってきています。デザインの方向性もなくなつてきていて、これからどうい



うものが出てくるかというのが非常にわからなくなつてきています。

建築家になる方法にしても、以前ならば有名大学の大学院を出て、有名アトリエに入って、そこで登竜門の賞を受賞して、海外に文化庁の奨励金で行って、帰ってきて独立するというかたちが多かつたのですが、たとえば、アトリエに入らずに大学卒業後すぐに独立して自分の事務所を開く建築家もいます。

以前は建築界の実力者に認知されるということがひとつのステップになっていました。その人たちがコンペの審査員をして、そこで可能性を見出した人たちにチャンスを与えて、彼らが地方で仕事をするようになります。それで有名になり、また実力をつけていくというかたちが多かつたのですが、そういうことも非常に少なくなつています。

■コンピュータと通信・交通網の発達を与えた影響

すでに何度もお話しましたが、1990年代半ばくらいからコンピュータが建築の世界に入ってきたことは建築デザインに非常に大きな影響をもたらしました。

また、以前なら海外に行つて現地の事務所の人と知り合いになつても、日本に帰つてきた後はほとんどコンタクトが取れませんでした。今はインターネットがありますので、お金を使わず、いつでも自由にコミュニケーションが可能です。海外の情報も簡単に入手できますし、海外の知り合いを通じて、海外の施主になる人たちに情報が伝わっていくといった状況も生まれています。

交通インフラの発達で、世界中どこへでも非常に行きやすくなつたというのも大きな環境の変化です。海外にいても携帯電話と電子メールがあれば、報告をいつでも受けられますし、いつでも指示が出せますので、24時間どこの国でも仕事ができるようになりました。以前ならば海外で仕事をしているのは、丹下健三さんや磯崎新さん、黒川紀章さんくらいでしたが、今は日本の建築家が海外で仕事をするケースが非常に増えています。日本ではそれほど実績のない30代の建築家も、いきなり海外のコンペに呼ばれたりしています。

■インパクトを打ち出すことの必要性

こういった状況が取り巻く現在、建築家自身が、どう生きていくかということを考えなければならない時代になっていると思います。

前半でもお話ししましたが、最初は非常にシンプルなデザインからスタートしたヘルツォーク&ムーロンが、最近では北京オリンピックの「鳥の巣」のような非常にインパクトのあるデザインをやり始めたということは、「印象深い建築をつくることで、建築界だけではなく一般の人にも認知されることが重要である」と彼らが感じ始めているということだと思います。

モダニズムの建築には、「形の種類を少なくすることにより、建築が多数あってもそれをうまくまとめる」ということができました。集合住宅などはその典型ですが、同じようなプランの建物を規則正しく並べる、ひとつの形態の建物を複数並べる、というようなことをやってきました。また、都市のつくり方もほとんどこれと同じような方法がとられてきました。

建築物にいろいろな形が出る前に、まず自動車産業が、車を売るためにさまざまな形の車をつくりましたが、形の異なる車が並んでいる駐車場というのは全然美しくありません。そういったものと対峙しなくてはならなくなった建築は、よりインパクトのある形をめざすようになってくると思われれます。つまり、インパクトのあるものを置くことによって周りをまとめる。あるいは巨大なものをつくって周りにある渾沌としたものを統合する。そういったことをこれからの建築がやろうとしているように感じます。

中山英之さんという若い建築家が設計した住宅のダイニングには、テーブルというよりも建築に近いような大きさの巨大なテーブルがあります。その巨大なテーブルの存在によって、同じ室内にいろんな形のいろんな物が置かれていても、それが気にならなくなるという体験をしたことがあります。たぶんそういったことが都市でも行われているというふうに思います。

2. 発注者の意識と環境の変化

■建築も積み上げ方式がニーズの主流へ

建築は、建築家だけではなくて、発注者がいて初めて可能になります。そこが美術作品とは違う点であり、建築には主観的なものと客観的なものが必要であると思います。

以前ならば、建築家に仕事を依頼する人は、建築家というものは1度決めたことでも白紙に戻して一から考え直すかもしれないなど、非常に不条理なことが起こり得るということもある程度理解して依頼していたように思います。ところが最近では、途中で白紙に戻すのではなく、積み上げていくことを前提として建築家に設計を依頼する傾向が非常に強くなっているようです。それは住宅でも巨大な建築でも同じですし、巨大な建築ほど積み上げていかなければ投資したお金が無駄になり予算がどんどん増えていきますので、積み上げていく方法しか

ないということになります。建築家にはファサードや全体のデザインだけを依頼して、実施設計などは組織事務所や大手ゼネコンの設計部に依頼するといった近ごろの傾向も、積み上げながら建築をつくっていくやり方のひとつであると思います。

前半でもお話ししたように、一般メディアが建築の情報や建築家を取り上げるようになりました。その影響で、今まではあまり建築に興味がなかった人たちが建築家に住宅の設計を依頼するケースが増えています。元々は商品住宅を買っていたような人たちですから、「最初に打ち合わせしてある程度決めたものがそのままできるだろう」といった認識が非常に強いわけですが、建築家に頼んでやり始めるとそう簡単にはいかないということで、いろいろとトラブルも出ているようです。

■発注者のもつ情報量の増大と

コミュニケーションの変化

インターネットの普及により、一般の人たちも建築に関する情報を非常に多く入手するようになってきました。インターネットで安い建材を探してきて、「中国から取り寄せるので、それを使ってほしい」と言うような発注者も現れています。ただ、実際には届いたものが使い物にならなかったというケースもあって、現場の施工者も含めてかなりたいへんな状況になっているようです。

建築家としては、「発注者がそこまで詳しくなったのなら、自分たちもそういった情報を収集して、それに対応しなければいけない」と考えた時期もあったようですが、近ごろでは「もうそこまでやる必要はない。知らない情報は発注者から聞けばよい。集まった情報について専門家としてジャッジをしていった方が得策ではないか」という方向に傾いているようです。これはまあ、諦めに近いのかもしれない。

インターネットの普及により、発注者と建築家のコミュニケーションの仕方も変わってきています。以前は一度打ち合わせをすれば、次の打ち合わせまで建築家側には考える時間がありました。ところが今は、打ち合わせから帰った晩に大量のメールが送られてくる。メールには、ここをこう変更してほしい、ここをもう少し考えてほしいといった要望が綴られていて、まずそれに答えなくてはならない。返答のメールを送ると、また新しい質問が来る。こういった方向に傾きますと、建築家が十分に考えるというよりも、発注者と建築家のやりとりの中で設計内容、建築内容が決まるというふうになっていきます。

もうひとつ面白いと思ったことは、最近では、公共建築をつくる際には、住民から要望などを聞くようになっていますが、そのときにワークショップという形がとられます。ワークショップですから、そこで住民の代表から、「こういうことはできませんか」「こういうことをしてください」といった要望が出てきたときに、その場でできるかできないかという判断をしないと次に進めないんです。ちょっと考えさせてくださいとなると、ワーク

ショップが成り立たない。ですから非常に無理な要望にも即答できなくなりました。

では、それに対処するにはどうすればいいかということになるのですが、あるプロダクトデザイナーが初めてプレゼンテーションをしたときに、出した案が気に入られなかった。そのときそのデザイナーの事務所のトップが15分で次の案を考えるからと言って、15分だけ時間もらって以前考えた別の案を出したら、その案は了解されたというんです。そのときにそのデザイナーが考えたのは、毎日絶えずアイデアを考えて、それをノートに書き留めておくことでした。つまり、引き出しを多くすることで、どんな注文や要望にもすぐに対応できるようにして、仕事のチャンスを必ずつかまえるということです。

しかし、このようなやり方は、過去に考えたもので現在に対応することだと思います。建築も含めてデザインというものは、これから先の未来のことを考えるわけですから、条件、要望が出てから考えた方が未来につながるというふうに私は感じています。

■状況を打開するために何ができるか

現在の非常に困難な状況をどう打開すればいいかというところが、なかなか見出し得ないのですが、とにかく若い人にチャンスを与える。やはりそういったことがいちばんではないかと私は思っています。

世界中を相手に活躍している隈研吾さんはパリに事務所を設けています。同じく北川原温さんはベルリンに事務所を設けています。なぜ海外に事務所を設けているかといいますと、日本人の建築家が海外で仕事をする場合、現地の資格を持った人たちと組まなければならないのですが、たとえそのようにしたところで、ファサードデザインや全体のデザイン監修、よくて基本設計までしかできません。それは海外の建築家が日本で仕事をする場合と同じで、その国の建築家の資格を持たないとその国の仕事ができないからです。それで隈さんや北川原さんは、実施設計まで行えるようにするために現地に事務所をつくらせているのです。

日本の30代の建築家たちは非常に才能がありますので、そういった人たちが海外で仕事をしやすいような状況をつくる、たとえばせめて彼らが現地の建築事務所と組めるような状況をつくっていくということが、若い建築家にチャンスを与えるひとつの道ではないかと思っています。



■投資を短期で回収するという循環

日本の現在の建築の状況を見ていて感じることは、商業施設などの発注者は、投資を回収するための期間は短い方がいいというような感覚をもっているのではないかと思います。一般住宅のオーナーにしても、自分の生きている間だけでもいいと考えているように思われます。だいたい30代に発注して、平均寿命が約80歳くらいとすれば、約50年間もてばいいということになり、そういった建築ばかりが発注される傾向が出てきているようです。

これらはどういうことかということ、日本の都市や社会をつくっているのは50年未満の建築だということです。しかも実際には50年どころか30年くらいで壊されていますし、高松伸さんの「キリンプラザ大阪」などは20年で壊されています。その結果、日本の社会は、そういう人間の寿命よりもずっと寿命の短い建築、ずっと寿命の短い都市しかもたないという様相を、ますます色濃く呈するようになってくるものと思われます。

それともうひとつ、超高層ビルが非常に増えています。これらにしても非常に短期でつくって、短期で投資を回収するよう計画されています。しかし超高層ビルの場合、投資を回収した後もやすやすとは壊せない。非常に大きなものを壊すということは、非常にコストがかかりますし、今後は簡単に跡地の計画が出てくる時代でもありません。以上のことから考えると、使えなくなった巨大な建築物と50年未満の中小の建築が等分するような都市が日本を覆うようなことが起こり得るということです。

私は去年の6月からチタン建材を建築家にご紹介するというコーディネートの仕事をしています。チタンは200年でももつ素材だろうと思います。しかし、これまで30年、50年しかもたない建築をつくってきた日本の建築家は、200年もつ素材、長期間もつ素材への対応はかなり不得手ではないか。そういったことをまず感じました。

ですから、今後たとえば寿命が50年未満の建築ではなく200年以上もつような建築を都市の中心、あるいは建築の中心にしていくとすると、チタンだけではなく、使う素材をいろいろと考える必要が出てくると思います。200年以上もつ建築となると、工事期間だけでも数年あるいは数十年かかるということも起こり得るかもしれません。ところが30年未満の建築をつくってきた素材ですと、完成する前にその素材が使えなくなるということもあり得るわけです。その意味でこれからは、長期間使える素材について考えていく必要がありますし、またそういう素材を生かせる工法やデザインについても考えていく必要があるんじゃないかと思っています。そういったことをやるには今が最後のチャンスかもしれません。今後も30年未満の建築をつくり続けるとすると、いずれ人口減少とともに日本の国力が低下していったときに、都市そのものが立ち行かなくなっていくという可能性も考えられます。昨年1年間、建築家にヒアリング調査をして、このようなことを感じました。

■公共の空間づくりを誰が担うか

人が集まる場所というものがあるようになってきているように感じます。都市にはいろいろな空間がありますが、お金を払わないと入れない場所の方が多いですし、お金を取らない場所があっても、そこは決して快適ではなく、人と人がコミュニケーションを始められるような環境にはなっていないように思います。

先月群馬県の太田市長と少しお話する機会がありましたが、太田市ではすべての公共建築に、高校生や市民が自由にに入れる空間を必ずつくって、そこで高校生が受験勉強をしているそうです。太田市長の自慢の話なんですけど、それによって太田市の高校生の大学進学率が非常に上がって、難関の大学にも入れるようになったとおっしゃっていました。実際に太田市では、普通は高校生が入れるような感じではない公共建築の中にもそういった自由に入れる空間をつくってました。

これからはこういった意識を持つことも重要だと思いますし、建築の中を通れば違う場所に行けるようになるというような、今までつながっていなかったところをつなぐという機能を建築の中に持ち込むことで、そこに新しいコミュニケーションが生まれてくる可能性はあると思っています。妹島和世さんと西沢立衛さんが設計した金沢市の「金沢21世紀美術館」は、元小学校だったところを美術館にしたもので、中が自由に通れるようになっています。この美術館の年間利用者は約100万人に上り、その経済効果は150億円くらいあるということです。自由に入れるようにすることで人と人が出会える、というような仕掛けをしていくとその地域が大きく変わりますし、人と人の出会いがあればそこは活性化していき、経済的な効果が出てくるということだと思います。

今までは地方自治体や国がつくった施設が公共空間としてあったのですが、今後はそういったものをつくる機会も減っていきますので、それに代わる公共空間の作り方を考えていく必要があると思います。

自治体や国にそれを任せられないとなると、当然ながら民間が公共空間をつくっていかなくてはなりません。その場合、税金は使えませんから、寄付などで公共のものをつくっていく必要が出てくるでしょう。また、公共空間をつくるとき、コミュニティが重要だという話になるんですけども、これまではコミュニティについて議論する場合、ほとんどが人間関係や地域社会学の研究者が中心で、建築や空間についての視点が欠けていました。しかし、人と人の関係の背後には必ず空間が存在します。公共空間を誰がつくるのか。建築や空間からコミュニティを考える。これらも今後の課題だと感じています。

私の話はこのあたりで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

講演終了後の質疑応答から

(質問者) 最近の建築家は長寿命の住宅に対応できていない、まだそういうような感覚になっていないというお話がありました。中崎さんの言葉の中には、今後、対応できるようになってほしいという希望のようなものが感じられたのですが、実際の建築家の方々は、そういうものに対応していこうとしているということでしょうか。それともそういう流れにはまだちょっとなりそうもないという感じなのでしょうか。

(中崎氏) 建築は発注者がいて初めて可能になるものですので、まず発注者側の意識として長寿命の建築を求めるという意識が高まらない限りは、建築家がそういったものをつくるチャンスは出にくいと思います。建築家側からそういった長寿命の住宅をつくる働きかけは、言葉や文章ではできるとは思いますが、やはり建築の場合、実際にものを見せないと理解してもらうことは難しいと思われれます。

具体的なものをつくるにも建築家ひとりではできませんし、その具体的なものをつくるための支援する体制をどうつくっていくかというようなことが重要じゃないかと思っています。

今までの方法ですと、国などの助成金や補助金を頼りに計画していくというのが一般的ですが、官僚が考えるフォーマットに沿ったものでないと、なかなか補助金や助成金は出ないというのが日本の難しいところです。そういった心意気や意欲のある人たちが集まるなどして、そういったことに投資するといったことが起こり得ない限りは難しいのではないかと思います。

中崎 隆司氏プロフィール

生活環境プロデューサー/建築ジャーナリスト

1952年福岡県生まれ。法政大学社会学部社会学科卒業
生活環境(パッケージ・デザインから建築、まちづくり、都市計画まで)に関するプロジェクトのアドバイス、および調査、企画、計画、設計などを総合的にプロデュースすること、建築・都市をテーマとした取材・執筆することを職業としている。

【著書】

『建築の幸せ』(2006年2月発行 ラトルズ)

『ゆるやかにつながる社会ー建築家31人にみる新しい空間の様相ー』(2006年11月発行 建設通信新聞社)

『なぜ無責任な建築と都市をつくる社会が続くのか』(2007年6月発行 彰国社)